

3. 光化学オキシダント (Ox)

平成 13 年度の光化学オキシダントの有効測定局は、1,189 局（一般局：1,160 局、自排局：29 局）であった。

このうち、環境基準達成局（昼間（5～20 時）の 1 時間値の最高値が 0.06ppm 以下の測定局）は一般局と自排局で 7 局（0.6%）と、依然として低い水準となっている（図 3 - 1）。

濃度別の測定時間の割合で見ると、1 時間値が 0.06ppm 以下の割合は 94.4%、0.06ppm を越え 0.12ppm 未満の割合は 5.5%、0.12ppm 以上の割合は 0.1% となっており、ほとんどの測定時間において環境基準値以下であった（図 3 - 2）。

また、大都市に限らず都市周辺部での光化学オキシダント濃度が 0.12ppm 以上となる日数も多くなっており、光化学大気汚染の特徴である広域的な汚染傾向が認められる（図 3 - 3）。

図 3 - 1 光化学オキシダント（1 時間値の最高値）濃度レベル別測定局数の推移

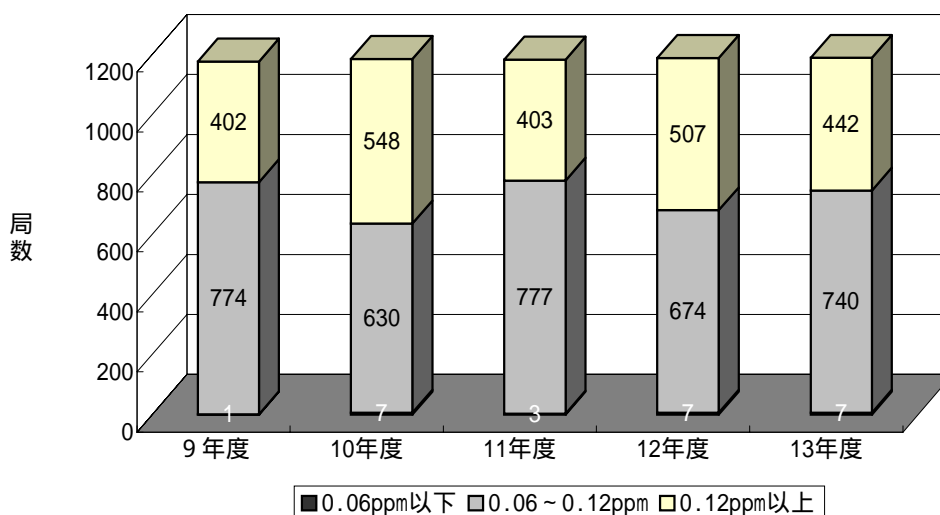


図 3 - 2 光化学オキシダント濃度レベル別測定時間割合の推移（昼間）

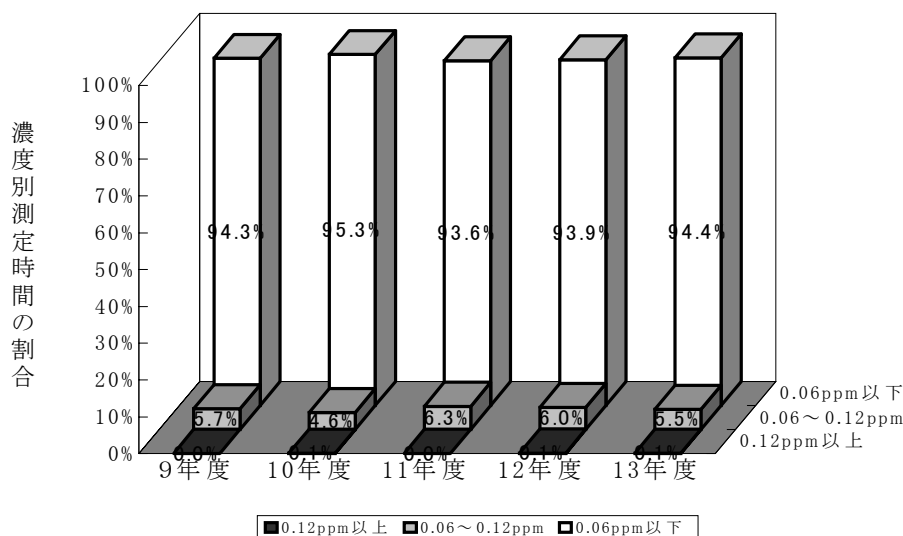
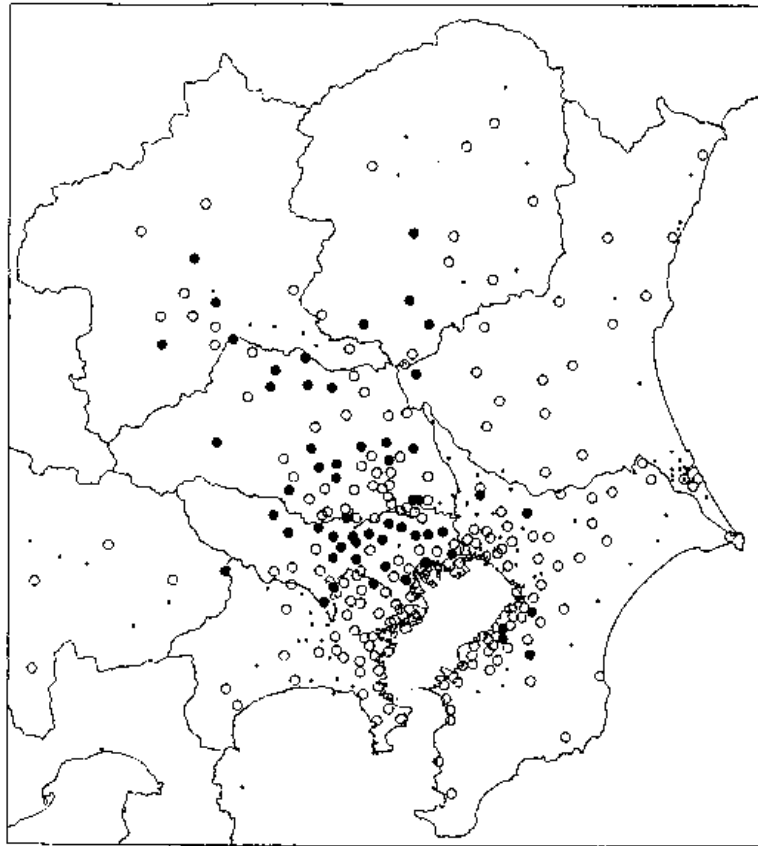


図3-3 注意報レベル(0.12ppm以上)の濃度が出現した日数の分布(関東地域、関西地域)

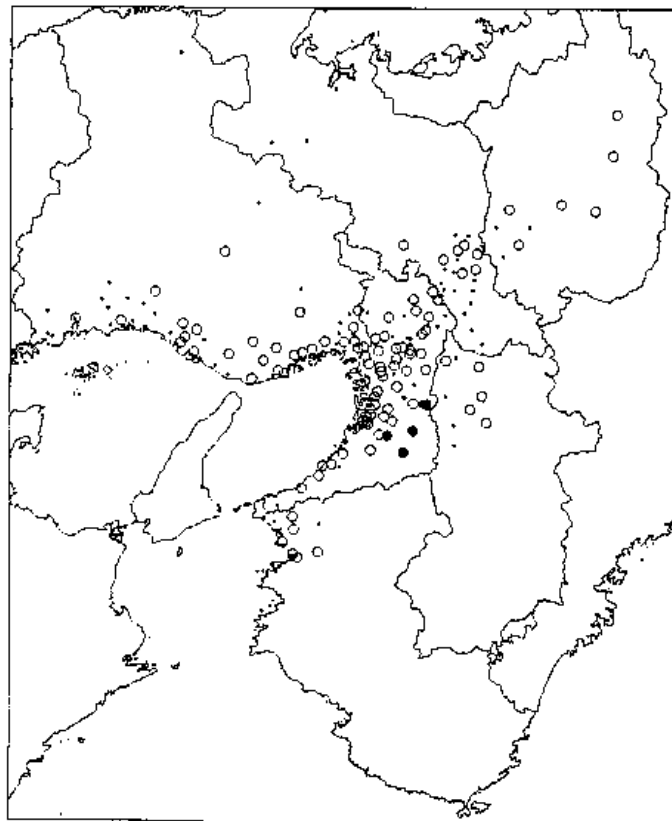
関東地域

- : 日数が10以上の測定局
- : 日数が1~9日の範囲にある測定局
- ・ : 日数が無かった測定局



関西地域

- : 日数が10以上の測定局
- : 日数が1~9日の範囲にある測定局
- ・ : 日数が無かった測定局



(参考) 非メタン炭化水素 (NMHC)

光化学オキシダントの原因物質の一つである非メタン炭化水素(全炭化水素から光化学反応性を無視できるメタンを除いたもの)について、一般局では、午前6時～9時における年平均値は、近年横這いからゆるやかな減少傾向を示しており、平成13年度(348局)は0.23ppmCであった(図3-4)。

また、自排局については午前6時～9時における年平均値は近年、減少傾向で推移しているものの、平成13年度(178局)は0.34ppmCであった。

大気環境指針：午前6時～9時の平均値が0.20～0.31ppmC以下

図3-4 非メタン炭化水素濃度の推移

